

天声人語

人類にとって幸運だったのは、その夏、生物学者フレミングが片付けもせずに実験室を離れたことだ。そのまま夏休みに入り、戻ってみると、ブドウ球菌の培養皿にアオカビが侵入していた。皮膚を化膿させる菌をカビが殺していたのだ▼1928年、世界初の抗生物質ペニシリンにつながる発見は、そんな偶然に導かれた。第2次大戦で多くの兵士の命を救い、肺炎や結核などの感染症にも用いられた「奇跡の薬」である▼ペニシリンに匹敵する。そんな声も聞かれる業績に、ノーベル医学生理学賞が贈られることになった。人がもともと持つ免疫の力を発揮させ、がん細胞を退治する。新しいタイプの治療薬「オプジーボ」につながる発見をしたのが京都大本庶佑ほんじゆう特別教授だ▼ペニシリンほどの偶然ではないが、この発見も最初はがんに関係するとは思わなかったという。別の研究で見つかった謎の物質を調べるうちに、がん治療の鍵を握ることがわかった▼「多くの人が石ころだと思って見向きもしなかったものを拾い、10年、20年かけて磨き上げ、ダイヤモンドにする」。それが研究の喜びだと、本庶さんは述べる。ダイヤの原石を求める好奇心。納得できるまで調べる頑固さ。華やかな業績の裏側である▼ペニシリンの後には多くの抗生物質の開発が続いた。免疫治療薬の歴史は始まったばかりだ。がんが脅威でなくなる日が「遅くとも今世紀中には訪れる」と、本庶さんは語った。若い研究者たちへのエールでもある。